

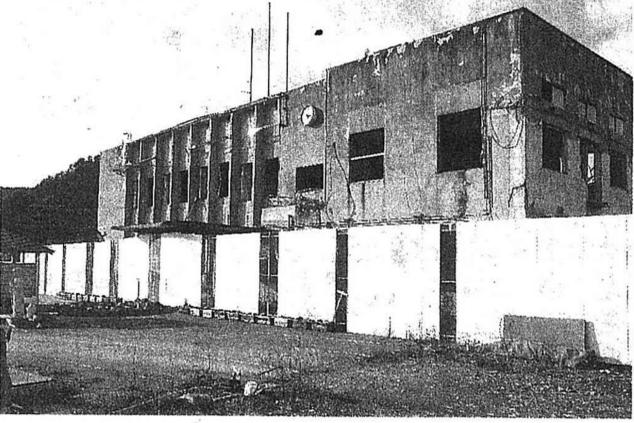
# 再建遅れ流出に拍車

東日本大震災が壊滅的な被害をもたらした自治体の一つ、岩手県大槌町。津波で家屋を流された中心部は広大なさら地が広がり、多くの住民が仮設住宅での生活を強いられたままだ。死者・行方不明者に加え、まちを離れる人々は後を絶たず、震災前後で人口の減少率が県内最大の自治体でもある。「あの日」から間もなく5年。現地にサポート拠点を置く国際医療ボランティアAMDA（岡山市）の活動を追いながら、被災地の今に迫った。

太鼓や笛のはやしが鳴り響き、地域伝来の獅子頭が舞う。飲食コーナーには地元でとれたサケを使った雑炊やホタテの網焼きが並んでいる。

1月30、31の両日、大槌町中央公民館で開かれた「おおつち感謝祭」。初日は町内で復興支援に携わる全国のボランティアや自治体職員ら約120人が詰め掛け、主催者あいさつで平野公三町長(59)はこう呼び掛けた。

「大槌の自然、食文化、伝統に可能性を感じ、ファーンとして将来にわたって交流していただくきっかけに



津波にのまれた旧大槌町役場庁舎は「震災遺構」として保存を求める声がある。1月31日

津波でほとんどの建物が流された大槌町中心部。今もさら地が広がり、地盤かさ上げ工事のショベルカーがごう音を響かせる。2月4日

## 復興道半ば

1 人口2割減

### 震災5年 岩手・大槌からの報告

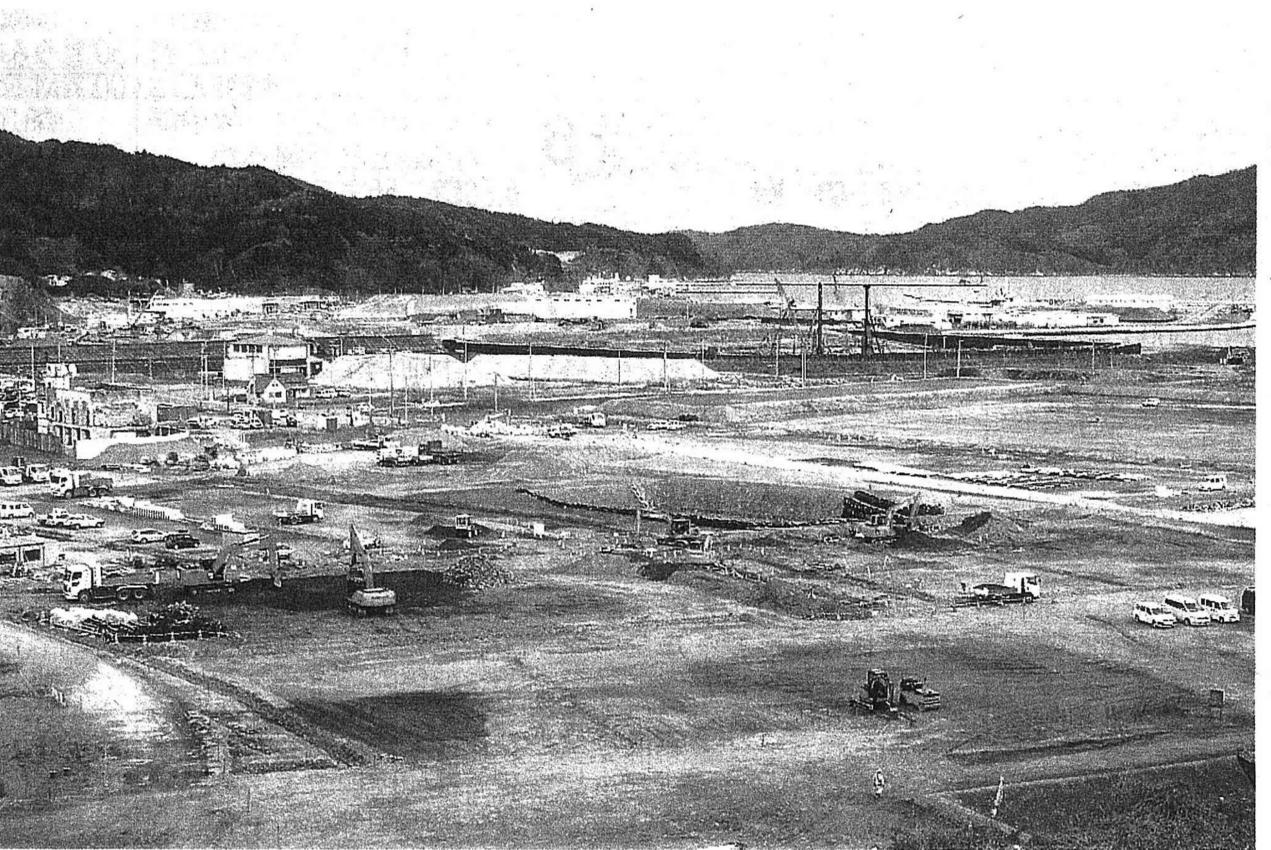
もう一つの狙いがあった。外部の人々との絆を深めることによる町の活性化だ。背景には壊滅的な津波被害と、これに伴う人口減少への危機感があった。

海沿いは広大なさら地。盛り土によるかさ上げ工事が



のダンプカーが行き交い、ショベルカーがごう音を響かせている。

「役場も商店も住宅も、建物はほとんど流された。前はここから海なんて見えなかったのに」。町を一望する高台で、案内してくれた地元の菊池公男さん(76)が言った。



**ズーム** 岩手県大槌町 県南東部に位置し、太平洋に面している。面積は200・59平方キロ。サケの水揚げやホタテ養殖、ワカメ生産といった漁業が主産業。人口は2月末現在1万2365人。沖合にある蓬萊島はNHK人形劇「ひょっこりひょうたん島」の舞台のモデルになったといわれる。

に上った。

震災後、ふるさとを離れる人は後を絶たず、2015年国際医療ボランティアAMDAの調査によると、町人口は前回調査(10年)に比べ23・2%減った。まちづくりや住宅再建の遅れが流出に拍車を掛けているとされ、町は将来を担う人材不足の危機にさらされている。

菊池さんは震災以降、町のさまざまな風景をカメラに収めてきた。復興の歩みを記録し、後世に伝えるためだ。被災状況や住民の暮らし、地域行事…。撮影枚数は1万枚余りに及ぶ。

最近では写真を見返すたび、いらだちを感じる。「復興を見届けて死にたいと思っていたが…。それもかなわないかもしれない」

大槌町では多くのボランティア

「被災者の心の傷は癒やされるどころか深刻になり、復興の遅れが加わって新たな問題も生まれている」

震災から5年。センター長の鍼灸師、佐々木賀奈子さん(53)は不安を募らせている。

復興を見届けて死にたいと思っていたが…